

山梨県南部町の西行伝承

― 西行舊跡系圖・富士見西行・西行峠の伝承の位相 ―

小堀 光夫

凡そ世の中のあらゆるものを「虚妄」と観じ、虚空の如き心をもつて俯瞰するならば、そこには虚も実も存在しない。西行に近づくには、そういう方法しかないように思われる。

（白洲正子「西行」）

はじめに

山梨県南巨摩郡南部町（旧富沢町万沢字西行）には、西行の同族、佐藤氏の末裔を名乗る遠藤家の所蔵する「西行舊跡系圖」をはじめ、「盆中の富士」で知られる甲州富士見三景の一つ、西行坂の富士見西行の伝承、西行峠で山賤との歌問答に敗れた西行が、そこから引き返したという、いわゆる「西行戻し」の伝承、小字の西行という地名など、複数の西行伝承が伝えられている。

本稿では、遠藤家蔵「西行舊跡系圖」を紹介しながら、西行地域に伝承される複数の西行伝承の整理を行い、その伝承の位相を探りたい。

一、遠藤家の「西行舊跡系圖」

南部町万沢字西行の遠藤家には、同家と西行との関係を記した「西行舊跡系圖」が伝えられている。「西行舊跡系圖」には、遠藤家のプライベートな内容も含まれているので、ここでは、西行に関する記事だけを紹介する。以下、①～⑯の番号、代目、（ ）内の西暦は、筆者が補足して記した。

- ① 遠藤家は、天兒屋根之命の裔、大織冠中臣鎌足の末流、田原藤太秀郷七世の孫に連なる佐藤憲清（西行）と同族である。
- ② 保元二年（一一五七）初代、佐藤又十郎秀行は、西行同様に武道を捨て、万沢上越度山の麓の地に来て農民となった。
- ③ 建久三年（一一九二）西行が駿河方面からやって来て、同族の初代、佐藤又十郎秀行を訪ねた。佐藤家所有の大榎のうろ穴に十数月滞在した後、東国を目指して去ったという。この

時、上越度山頂、後の西行峠にて西行は、「甲斐根に来つ、なれにし旅衣 春雨しのぐ峯の松かげ」⁽³⁾の歌を詠んだ。

④元仁元年（一二二四）初代、佐藤又十郎秀行、七月死去。

⑤元弘元年（一二三二）頃、五代目、佐藤友之助は、村役を務め西行の遺風を守り、西行を朝夕尊崇した。

⑥天正二年（一五七四）二十四代目、佐藤与三郎の代に火災で、西行の寝泊りした、大榎が焼失。

⑦天正十七年（一五八九）八月、福土村生まれの遠藤氏、佐藤家に入籍。

⑧正保元年（一六四四）二十五代目、遠藤五左エ門。正保元年、天下系図改によつて佐藤を廃し、これより自己産家の姓を用いて、遠藤姓となる。

⑨寛文五年（一六六五）二十七代目、遠藤又兵衛、所有地縄受、当時役人、萩原孫四郎の尋ねるところにより、西行来遊を記した当家系図を差し出す。

⑩寛文十年（一六七〇）二月中旬、系図を見た役人が旧跡に感じて、上越度村を西行村へ、上越度山を西行峠へと、地名が変更⁽⁵⁾される。

⑪享保三年（一七一八）正月、火事により、西行の宝物がすべて焼失。

⑫享保十六年（一七三二）西行峠の大松、落雷により焼失。

⑬文化七年（一八一〇）三十三代、遠藤利八、井戸を掘り、西行清水井と名づける。西行峠、開山の元祖。

⑭天保六年（一八三五）三十四代、遠藤平助、三十六歳の時、西行峠寿量坊⁽⁶⁾建立のため屋敷を献上。

⑮明治二十四年（一八九二）旧二月十五日、三十六代、遠藤憲次、西行法師第七〇〇年忌供養。

⑯明治四十四年（一九二一）三十六代、遠藤憲次、西行峠の写真を撮る。

⑰大正十一年（一九二二）八月、三十七代、遠藤憲明、次男、遠藤憲三誕生をもつて「西行舊跡系圖」終わる。

「西行舊跡系圖」末尾の余白に「西行峠 明治三十七年三月蜜柑植付」「大正九年九月写之」と書き込まれ、続けて「十本の歯をまだ塩で磨きけり 六十四の春の花見に 憲次」と記されていることから、「西行舊跡系圖」は、大正九年九月頃、三十六代、遠藤憲次によつて書かれたことが分かる。

「西行舊跡系圖」によれば、遠藤憲次は、明治二十四年旧二月十五日に、西行法師第七〇〇年忌供養を行った人物であり、萬澤銀行の支配人も務めていた。昭和七年刊行の『萬澤村誌』⁽⁷⁾には、村の収入役としてその名前が見える。

憲次の名は、銀行の支配人、村の収入役といった実務的な仕事の記録ばかりでなく、「西行舊跡系圖」末尾の歌や、明治三十二年四月、西行地区の氏神、左口神社拝殿天井修繕の際、格天井の各桟にはめ込まれた絵入りの歌を奉納するなど、文芸の分野にも関心が深かった。「明治三十二年四月組内一結 當社

天井修繕 世話人「発句催主」とそれぞれ板に墨文字で書かれ、左口神社拝殿の中に残されている記録にも、世話人の一人として憲次の名が見える。

左口神社の祭神は、左口大明神（保食神）、七面大明神、大山祇神で、祭神の中でも特に七面大明神は、法華経と日蓮宗、身延山久遠寺の守護神とされている。

遠藤憲次については、憲次の次男、遠藤利明の歌集『無記のこころ』⁽⁸⁾に詳しい。憲次と西行に関する歌の一部を次に紹介する。

西行有縁

いつの世に誰がつけたかふるさとの西行の名よまほろし
の名よ

甲州の最南端に生まれたり今も地名を西行という
仏壇に西行法師の位牌あり屋敷の中に祠もあるに
確証の無くて地名のみ西行というに惹かるる吾れをあわれむ

亡き父は吾が若き頃山家集一冊を吾に手渡しにけり
亡き父が絵にまで刷て樂しめる西行峠よ蜜柑畑よ

西行は盆中の富士に見とれけむ松高く立西行峠

西行が盆中の富士よと眺めたる西行峠よふるさとの山

雉子啼く

祖父以来四代も使う憲の文字よくよく西行にひかれたる家

亡き父・亡き母

山家集一冊をわれにくれし人さびしき人を亡き父に知る
遠き祖に利八と言うあり一字とりて汝が名とせしと父の
たまいき

利明の歌から、父、憲次から西行の歌集『山家集』を手渡されたこと、西行の出家前の名前、憲清の「憲」の字を、三十五代目の憲成からはじめて、憲次、憲明、憲三と四代に渡って「憲」の字を使っていること、利明の名前は、父である憲次が三十三代目の利八から名づけたことなどがわかる。

三十三代目の利八は、西行峠開山の元祖と「西行舊跡系圖」に記事があることから、遠藤家は、元は西行峠の上り口の西行ではなく、西行峠付近の増野にあった。

日蓮宗の本山、身延山久遠寺に連なる万沢地区にある長寿山顕本寺の末寺で、西行峠に明治初年まであった寿量坊建立のため三十四代目の平助が、家屋敷を献上するなど、西行峠にあった寺院、寿量坊との関係も深かった。現在、寿量坊にあった西行の石像（写真1参照）が、西行地区の大玄坊に残されていること（遠藤武志（昭和八年生）談）から、寿量坊が西行伝承に関わっていることがわかる。像は長年の風雨によって磨り減っているが、手に笠を持つ富士見西行の意匠が見える。

また、三十五代目の憲成からはじまった西行を意識した「憲」の字の入った名前、憲成の墓石に刻まれた辞世の歌など、憲成

の代にはすでに当主が和歌を詠む家風が遠藤家にあったことがわかる。もちろん憲成の辞世を墓石に刻して建立したのは憲次である。

憲成の次の遠藤家当主、憲次は、憲成同様、和歌の実作者、また西行峠を所有する地域の旧家の当主として、西行思慕の心情から、おそらく遠藤家系図の原本（現在、未発見）を元に「西行舊跡系圖」を作り、西行法師第七〇〇年忌供養を行うことによって、遠藤家と西行との関係を地域の内外に示したいと強く考えていたことがわかる。

一方で明治九年には西行峠を迂回する新道の開通、さらに大正七年には、富士身延鉄道（現、JR身延線）が、富士から十島駅まで開通し、西行峠は峠道としての役割を終えた。また、明治二十七年（一八九四）に刊行された『山梨鑑』⁽⁹⁾に、甲州富士見三景の一つとして西行坂（同書では、西行峠でなく西行坂となっている）の「盆中の富士」が紹介されたが、遠藤家の西



写真 1 西行像

行伝承には触れていないことなど、新道と鉄道の開通によって宣伝される公的機関の富士見西行伝承への意識も、憲次が「西行舊跡系圖」を作った背景にあったと考えられる。

二、西行坂と富士見西行

西行坂と富士見西行の記事は、文化十一年（一八一四）刊行の地誌『甲斐国志』に次のように記されている。

○西行坂^{村同} 村ノ北駿州路ニ小阪アリ民戸アル処ヲ西行村ト名ク富士川此ニ漲リ東へ転ズルヲ西行滝ト云、岸、上高キ処ニ一株ノ松アリ老大ニシテ地ヲ覆ヒ盤根多ク露ハル実ニ数百歳ノ物ナリ里人ノ説ニ西行此、丘上ニ廬シテ憩息セリ駿河ナル富士ノ烟ノ空ニ消テト詠ゼシハ此処ナリ因テ地ニ名ヅクト云々：中略： 西行去テ後里人石像ヲ作り此樹下ニ安ゼリ世ニ伝ル富士見西行ノ図ハ蓋シ是ヨリ模スルナリト云、此、石像今ハ所在ヲ失セリ東ノ山低ク平ニ其上ニ富士山現ハレ積雪常ニ皎ク恰モ盆中ニ盛ルガ如シ北ニ河灘ヲ遙眺シ風景殊ニ勝レタリ富士ノ画ニ前ニ山ヲ置キ又月ヲ添タルハ皆ナ本州ヨリ望ム所ノ山形ナリト云コト然モアランカ

ここでは、「西行舊跡系圖」にあった西行峠は、西行坂と記さ

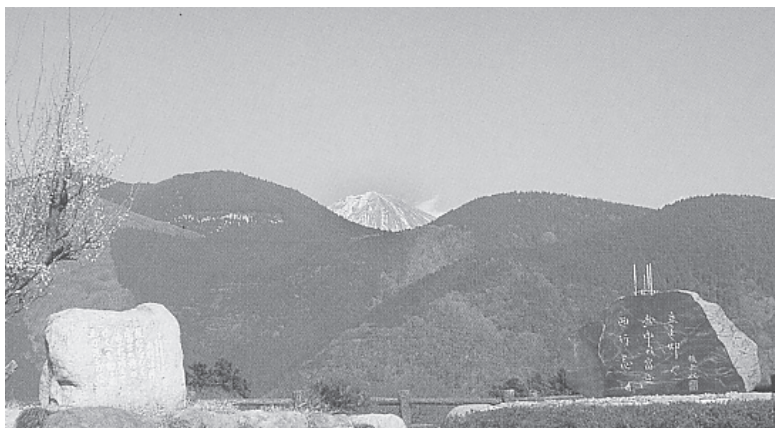


写真2 西行峠から見た「盆中の富士」

『甲斐国志』には、西行村、西行滝など西行にまつわる地名が見られ、西行が西行坂の上に庵をつくり安らいだ折、富士の和歌を詠じたことからそのような地名となったと記している。ま

れている。西行坂のことは、西行の松の記事とともに、深草元政『身延道の記』⁽¹⁰⁾万治二年（一六五九）や、加賀美遠清『甲陽隨筆』⁽¹¹⁾天明朝（一七八一―一七八八）にも記されているが、富士山を詠んだ西行の和歌や、富士見西行、盆中の富士の記事とともに記されたのは、管見によれば『甲斐国志』が初出である。

た、西行が去った後、村人が、富士見西行の石像をつくり置いたことにより、世の富士見西行図は、これを模したとも記している。後に、富士見西行の石像は失われたが、ここから見える富士山が、「盆中の富士」（写真2参照）と呼ばれる名勝地であり、富士を描いた画は、みなこの富士の山形であるとしている。しかし、『甲斐国志』にある富士山を詠んだ西行の歌「駿河ナル富士ノ烟ノ空ニ消エテ」は、『新古今和歌集』では「風になびく富士のけぶりの空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな」⁽¹⁴⁾とあり、歌が違っている。『甲斐国志』が何を元に「駿河ナル富士ノ烟ノ空ニ消エテ」と記したか分からないが、同様の西行の歌は、中世の末頃書かれた『月刈藻集』⁽¹⁵⁾にも見える。

また、明治二十七年（一八九四）に出た『山梨鑑』には、西行坂や西行の庵の記事とともに、こちらは、『新古今和歌集』の西行の歌が記されている。大正七年には『山梨鑑』を見た大町桂月が、開通した富士身延鉄道に乗って、富士見三景、西行坂を尋ね、紀行文「富士見三景めぐり」⁽¹⁶⁾を記している。

汽車は富士川の峡谷に入り、富士川を左に見下しつゝ、芝川を経て十島に達す。

驛を出でて青年會の木標の教ふるまゝ、に左折し、線路を過ぎて又も左折して渡舟に乗る。舟夫、棹を用ゐず、銅線をたぐりて、舟を進む、『西行坂はどのあたりにや』と舟夫に問ひしに一人の洋傘さしたる同舟の男、素早く差出でて『そ

れは富士見三景の一なり。彼處なり」とて、無造作に前方數町の外なる二三の松樹の立てる小山の頂を指す。愚かや、甲州人士には斯くばかり一般に知れ渡りたる富士見三景を、余は十數年もかゝりて、空しく書籍の上に搜したりし也。

西行と稱する小部落の人家の間より左折して山田に入り、二町ばかりにして右折し、小橋を渡りて、山路に就き、僅かに五六町上れば、早や頂上也。古松四株、二株づゝ、近く相接し、一方の二株、他の二株と相對して、關門の觀を成す。石龕ありて、觀音を安んず。富士はと見れば、圓味を帯びたる山と山の間に五六合以上を露はす。その頂は普通畫に見るが如く、三峯分立す。雪を被らば觀更に美なるべし。…中略…今や新道富士川に接して、山麓をめぐる。あたらしい奇景も、土人の外には見る人もなし。されど身延鐵道延長して、西行坂は十島驛より數町以内の勝地となれり。ゆくゆくは身延詣の風流を解するもの、ぼつゝ歩を枉ぐるに至るべき也。

桂月は「富士見三景めぐり」の中で、鐵道の開通により、西行坂に右の桂月のような旅行者が増えることを記している。西行坂を富士見三景とする江戸以来の名勝地化、近代の觀光地化の流れは、山梨縣が、昭和六年に刊行した『山梨県名木誌』⁽¹⁷⁾に写真入りで「西行坂の松」が紹介されていることから確認できる。一方、昭和七年に刊行された『萬澤村志』では西行坂の

地名が、西行峠へと変わっている。

平成二年には、富沢町教育委員会編『西行峠の伝説と文学』⁽¹⁸⁾に西行伝承が、まとめられた。平成五年には、西行峠に西行公園と西行庵が建設され、平成十年には、西行峠の西行公園に、西行の歌碑（富士山に向かって左側）「風になびく富士のけぶりの空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな」と、日本俳人協会会長松崎鉄之介の句碑「友と仰ぐ盆中の富士西行忌」（富士山に向かつて右側）が盆中の富士を背景にして建立された。（写真2参照）

このように西行坂（西行峠）では、「盆中の富士」という景觀を、西行の歌と合わせて、身延山巡礼の名所や、県や町が、地域活性化の觀光資源として利用したと思われる。

その一方で、西行坂（西行峠）の伝承の成立には、西行坂を身延山參詣の道中の名所となるように動いた身延山に關係する宗教者の関与が考えられる。西行坂に一時、庵を結んだ先の顯本寺末の寿量坊と「西行舊跡系圖」に「遠藤平助、天保六年即三十六才ノ時西行峠寿量坊建立ニ付屋敷ヲ献上ス」とあるように、かつては寿量坊を支えた遠藤家もそれを担っていたことが推測される。

三、西行峠と西行戻し

大正二年（一九一三）に高木敏雄が著した『日本傳説集』⁽¹⁹⁾に

は、次のような伝承が記されている。

甲斐国南巨摩郡西行峠は、駿河路から富士川に沿ふて、甲斐へ出る路であるが、此ところを、西行峠といふのには、面白い伝説がある。昔、西行法師が歌修行のために、諸国をめぐり、自分の歌の上手なのを鼻にかけ、自分より豪い歌よみが有るものか、と思いつ、此処の山道に差しかけると、一人の山賤に遇った。甲斐国に歌よむ人があるかと問ふと、その山賤が、お前様は歌をおよみ成されますか、そんなら私も一首やりませう、聞いて下され、と云つて、

イキツチナ、ツボミシ花ガ、キツチナニ、

ブッピライタル桶トジの花、

と説んだ、西行法師は、此歌の意味が解らないので、驚いて了つて、甲州では山賤さえ、こんな歌を読む位だから、中へ入つたら、どんな目に遇はされるかも知れぬ。今少し修行した後で、甲州へは来た方がよい、と思つて、其処から引返した。だから西行峠の名が出来たのださうな。此山賤の歌の意味は、往く時に蓄んでゐた花が、帰る時には咲いてゐた、ということ、桶とじの花と云ふのは、桜の花のことだ。桜の皮は曲物をしめるに使ふから、桜のことを桶とじと云ふのである。：以下略（山中共古君）

『日本傳説集』によれば、西行が山賤の詠んだ「イキツチナ、

ツボミシ花ガ、キツチナニ、ブッピライタル桶トジの花」歌の意味が分からずに、そこから引き返したことから西行峠の地名がついたという、甲斐国南巨摩郡西行峠の地名由来として、山中共古が報告している。

山中共古は、柳田國男の『石神問答』において往復書簡の相手を務めた在野の郷土史家で、『甲斐の落葉』など数々の著作を残している。山中の報告した西行峠の伝承経路については『日本傳説集』に記事はない。

『西行舊跡系圖』や『甲斐国志』では、西行は、西行峠に庵を結んで歌を詠んでいるが、『日本傳説集』の伝承では西行は引き返して、伝承内容が異なっている。その後、山中共古が報告した『日本傳説集』の西行峠の伝承は、『甲斐の民話』⁽²⁰⁾『富沢町の生活文化』⁽²¹⁾にも引用され、さらには、伝説研究のための総合的資料集『日本伝説大系』にも収載された。

『甲斐の民話』『富沢町の生活文化』にはまた、西行が、少年の詠んだ「冬青む夏枯れ草を刈りにゆく」の歌の意味が分からずに引き返したという伝承も記されている。

その他にも、『富沢町の民話と体験記 第一集』⁽²²⁾には、「萩にはね糞」⁽²³⁾『富士川谷物語』には「ウルカ問答」といった話も記され、西行にまつわる口承文芸資料だけでも多様な伝承となっている。

『日本傳説集』の西行峠の伝承は、その内容からすると西行戻しの伝承であり、各地においても、西行が、聖地とされる神社

がある山や地域に入ることができずに引き返すという話になっている。

筆者も宮城県遠田郡涌谷町篁岳にある篁峯寺の西行戻し伝承について他山支配となった一山の修験が山から追放される事件を西行戻しの伝承の背景に考察したことがある⁽²⁾。

「西行舊跡系圖」「萬澤村誌」には、江戸後期に、西行峠に寿量坊、西行峠の麓の西行村には、大玄坊⁽²⁾という身延山の末端寺院があった記事があるが、それぞれ明治の初めに廃坊となっている。つまり、西行峠の西行戻し伝承の背景に、西行峠から下山した(戻された)寿量坊の廃坊を垣間見ることはできないだろうか。西行峠の寿量坊にあった西行の石像(写真1参照)が、廃坊後、峠を下ってふもとの大玄坊に移されたこともそれを暗示していると思われる。

おわりに

ここまで遠藤家蔵「西行舊跡系圖」を中心に、「西行舊跡系圖」を作った遠藤憲次、和歌の家としての遠藤家、遠藤家と寿量坊について、また、西行坂と富士見西行の伝承では、「盆中の富士」という景観を西行の歌と合わせて、身延山巡礼の名所や、県や町が、地域の観光資源とする伝承について、さらに、西行峠の西行戻し伝承では、明治の廃仏毀釈による寿量坊の廃坊の歴史を、その伝承の背景に考えた。

現在、南部町に伝承される多様な西行伝承は、「西行舊跡系圖」といった家(遠藤家)の伝承、西行峠の富士見西行という身延山に至る名所としての公(県、町が関わる)の伝承、西行戻し伝承を地域の伝承として話す庶民の伝承といった立場によって西行伝承はその位相を異にしている。

また、西行峠をめぐる西行伝承成立の背景には、遠藤家と寿量坊、身延山との関わりが推測されるが、この解明は今後の課題である。

最後に、多様な西行をめぐる伝承を、西行地域の人々は、いずれも否定はしなかった。それは取りも直さず地域の地名からして西行となつてのことからも明らかであるように、西行地区の人々にとっては、どの西行伝承も、地域と西行とを結ぶ大切な伝承の一つと考えているからである。

注

(1)「西行舊跡系圖」の簡単な書誌は以下の通りである。①所蔵、南部町万沢字西行、遠藤澄江家蔵。②形態、写本、綴葉、一帖。③時代、大正九年写。④寸法、縦二七糎、横二〇糎。⑤外題、系圖。⑥内題、西行舊跡系圖 上街道記録。⑦料紙、和紙。⑧丁数、墨付本文、一四丁。

また、遠藤澄江家には、西行の位牌も伝えられている。位牌には「建久九年 佐藤院殿西行圓位法師 二月十五日卒」とある。高さ、五三糎、巾、一八糎、奥行、七・五

糧で、江戸後期から明治頃に作られたと思われる。「西行舊跡系圖」に「遠藤憲次、明治二十四年旧式月十五日 西行法師第七〇〇年忌供養ス」とあるので、この折、作られたものと推測される。現在は、南部町万沢にある日蓮宗長寿山顕本寺に預けられ、供養されている。

- (2) 『尊卑分脈』秀郷流に「秀行」の名が見えるが、詳細は不明。
- (3) 佐野幸知『萬澤村誌』昭和七年（一九三二）に記された西行の伝承歌では、「甲斐か根にきつ、なれにし旅衣春雨しのく松のしたかげ」となっていて「西行舊跡系圖」の歌とは下の句が一部異なっている。

- (4) 「万沢村明細帳」享和二年（一八〇二）（『山梨県史資料叢書 村明細帳 巨摩郡編』一九九六、山梨県）に、

萩原孫四郎様
戸倉小左衛門様
御檢地御奉行様
太田甚兵衛様
西御丸様
今井半兵衛様

甲斐国巨摩郡

万沢村

とあり、「西行舊跡系圖」に「寛文五年（一六六五）二十七日目、遠藤又兵衛、所有地縄受、当時役人、萩原孫四郎の尋ねるところにより、西行来遊を記した当家系図を差し出す」と記事のある萩原孫四郎の名前が見える。

- (5) 西行という地名については、『富沢町誌 上』（二〇〇二）

富沢町）第三章 近世に、宝永二年（一七〇五）「万沢村諸色明細帳」に「二百姓林八ヶ所 西行・越戸・上横沢・森山・平山・下横沢・松山・権現堂」の記事がある。また、「西行舊跡系圖」には、「寛文十年（一六七〇）二月中旬、系図を見た役人が旧跡に感じて、上越度村を西行村へ、上越度山を西行峠へと、地名が変更される」と記されている。

『日本歴史地名大系 第一九巻 山梨県の地名』「西行坂」の項には「西行という地名はもともと行商人に由来すると思われる」とある。

- (6) 寿量坊について、「西行舊跡系圖」には「遠藤平助、天保六年即三十六才ノ時西行峠寿量坊建立ニ付屋敷ヲ献上ス」とあり、佐野幸知『萬澤村誌』昭和七年（一九三二）には、「又此の西行峠に明治初年前迄は壽量坊と云ふ坊舎あり安永九年西行村縫右衛門氏身延四十七代日豊上人御入山の御御茶の接待したるにつき坂本尊を賜りしより壽量坊を建立す後數代明治七年廢坊跡は畑となれり」とある。

遠藤家は、寿量坊が廢坊する以前は西行峠で茶屋をやっていたという話（遠藤信一郎（昭和六年生）談）もある。また、寿量坊廢坊後、「西行舊跡系圖」末尾の余白に「西行峠 明治三十七年三月 蜜柑植付」とあるように蜜柑畑を作っている。

- (7) 佐野幸知『萬澤村誌』昭和七年（一九三二）には、明治三十二年四月と明治三十六年四月に、収入役として遠藤

憲次の名前が見える。

(8) 遠藤利明『無記のこころ』昭和五九年、自刊。

(9) 『山梨鑑』明治二七年(一八九四) 山梨鑑編纂局。

(10) 深草元政『身延道の記』(『身延道の記』一九七一 瑞光寺)に「廿五日、万沢を出て坂あり。馬、をふもの、いはく、此坂を西行ざかと申す。この松は西行の松と申すといふ。歌など、あらんとおもへど、とはんよしなし。」とある。

(11) 加賀美遠清『甲陽随筆』(『甲斐叢書』二卷 一九七四 第一書房)に、「巨摩郡西行村之事 一巨摩郡川内領萬澤村、^{石部三十三}枝郷西行村と云は、昔西行法師駿河國興津川の入獅子糸通より甲斐國へ來り右村に庵室を結びて暫く住たる故に西行村と申よし、右村より福士村へ通る往還の道に、西行坂、西行松とて舊跡有之、」とある。

(12) 『甲斐国志』に記された、失われた西行峠の西行像以外に、現在、富士見西行の石像は、南部町万沢字西行、遠藤澄江氏宅庭の小祠と、大玄坊跡の小祠にある。現在、大玄坊にある西行像は、西行峠にあった寿量坊のものを移動したという(遠藤武志(昭和八年生)談)。

『富沢町誌 下』(二〇〇二 富沢町)第三章 民間信仰 第五節 近世以降の石造物「弘法大師・西行法師」の項では、「西行集落内には祖師堂と個人宅庭に西行像が祀られている。様々な法難に会いながら旅行く聖者としての日蓮像を西行法師に重ね、来訪神としての靈験に期待する信仰

から造られたと考えられる。」とある。

(13) 富士見西行を描いたものとしては、江戸時代初期の画家、狩野守信(探幽)、尚信、安信らが描いたとされる「富士見西行図」等、がある。

(14) 『新古今和歌集』巻第十七、雑歌中に、「あづまの方へ修行し侍りけるに、富士の山をよめる」という詞書とともに載っている歌である。

(15) 『月刈藻集』下(『續群書類従 第三十三輯上 雑部』訂正三版 一九五八 續群書類従完成會)には、「風になびく」の初句を藤原俊成が直したという次のような説話がある。

人語云。西行法師カ詠テ云。

スルカナル富士ノ煙ノ空ニキヘテ行衛モシラヌワ
カ心哉

此歌俊成ニミセ奉リケルニ。フジトイヘルニスルカナルト侍ル。口惜キ名所哉ト仰アリシニ。西行如何置ヘキ歟。俊成又云。富士ハ日本ノ寶跡ナレハ。スルカトイワデモヨシ。風ニナビクトアリタキニコソト申サレシカハ。西行大キニヨロコンテナヲシ書付置タリ。

(16) 大町桂月「富士見三景めぐり」(『桂月全集』第二巻 一九二六 興文社)。

(17) 『山梨県名木誌』一九三一 山梨縣。

(18) 『西行峠の伝説と文学』 一九九〇 富沢町教育委員会編。

(19) 高木敏雄『日本傳説集』(『日本傳説集』第二刷(修正版))

一九七五 宝文館出版)。山中共古報告と同様の話を、筆者は西行地区に住む、渡辺正次(大正五年生)、ぎん(大正十年生)夫妻から二〇〇八年十月二七日の採訪の折、お聞きした。

(20) 土橋里木『甲斐の民話』 一九五九 未来社。

(21) 『富沢町の生活文化』 富沢町誌編纂資料第五集 一九七六 富沢町教育委員会編。

(22) 『富沢町の民話と体験記 第一集』 一九八〇 富沢町教育委員会編。

(23) 加藤為夫『富士川谷物語』 一九八七 山梨日日新聞社。

(24) 小堀光夫『篋岳の西行伝承』(『菅江真澄と西行伝承』二〇〇七 岩田書院)を参照。

(25) 大玄坊は、慶応四年(一八六八)の書上『甲斐国社記寺記』によれば、日蓮宗の本山、身延山久遠寺に連なる万沢地区にある長寿山頭本寺の末寺で、佐野幸知『萬澤村誌』昭和七年(一九三二)には、「又當區に大玄坊と稱し何れの時代より存在ありしや詳ならずと雖ども文政二年十月長州吉敷郡の住人は信坊日眞及源波馬長の兩人祖師尊躰を彫刻し茲に安置したるものなりと云ふ(西行太郎兵衛君宅古書)後文政九年七月身延五十六代日晴上人より當坊居住大玄坊大玄日德上人時代大玄坊と命號すとあり其

後明治七年廢坊す跡は夜學校になしたりしが昭和二年春祖師日連上人元の尊躰を駿州江尻地方より迎ひ茲に安置し又元の大玄坊とせり」とある。

(26) 西行が身延を詠んだ歌としては「雨しのぐ身延の郷のかき柴に巢立ちはじむる鶯のこゑ」(夫木抄)がある。

付記

山梨県南部町採訪に際して、鍋田幹雄氏、遠藤澄江さんをはじめとした西行地区の皆さん、南部町立富沢図書館の司書の方々には大変お世話になりました。記してお礼申し上げます。

(こぼり・みつお／國學院大學兼任講師)